

『徒然草』研究—序段について—

● 土 屋 博 映

一、はじめに

日本人なら誰もが知っている『徒然草』は、実は『徒然草』という題名を持った古典文学作品であるということしか確実ではない。また、その真価も不明確な点が多い。文学作品は作家の思いとは無関係に世の中に受け取られるものである。コミュニケーションの発信側がプラス（よかれ）の気持ちで表した表現が、マイナス（わるかれ）に受信側がとることはよくある。日常茶飯事と言ってもいいくらいだ。文学作品においても同様で、作家の意図と違ったところで評価されることは実に多い。古典文学も同様。『徒然草』も例外ではない。

本稿では『徒然草』の序段を中心に、第二四三段を関連させ、作者兼好の意図が、本来どのようなもので、どのように受け取られており、どう受け取るのが最善か、を古典とのコミュニケーションという発想で、論じてみたい。

序段は、あの『徒然草』の名称のもととなったと言われる「つれづれなるままに」に始まる一文であり、第二四三段は「八になりし年」に始まる、父との問答の一文である。これら二段をとりあげたのは、序段は、本書の最初の段であり、第二四三段は、最後の段であるということが、最大の要因である。それは、月並みな考えだが、最初の段には作者兼好の、本書を記す方向性があり、最後の段には本書の幕を閉じる、結論めいたものがあると、考えたからである。作者兼好が、今見られる形で第一段から各段を書きつづって行ったという一般の説にならえば、結果的に冒頭の段と最終の段は何らかの発端とまとめの気持ちが背景にあり、それは照応してしかるべきものだと思うからである。

本稿は、まず序段につき『日本古典文学全集』（注1）を本文とし、先学の説をふまえ、検討し、序段についての自分なりの見解を示し、その上で、二四三段との照応関係について、アプローチ（コミュニケーション）し、『徒然草』の本質について、若干でも迫りたいと考えている。

二、序段について

まず序段全文掲げる。まずは序段とのコミュニケーションである。

「つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかどなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」（序段）

この序段を、『諸注集成』（注2）は次のように訳している。

① ひまで手持不沙汰なのにまかせて、終日硯に対して、心（の鏡）に映って（は消え、映っては消えて）行く、やくにも立たぬむだごとを、とりとめもなく書きつけたところが、（その書けたものは）ほんとうに、へんにわけもわからぬものであるわ。

これが、『全注釈』（注3）によると次のようになる。

② しようにもすることのないのにまかせて、終日、机の上に向かいながら、心中につぎつぎに移ってゆく、とりとめもない事を、何というあてもなく書きつけてみると、妙にわれながらばかばかしい気持がすることである。

『全集』は次のように記す。

- ③ なすこともなく、ものさびしさにまかせて、終日、硯にむかって、心に浮かんでは消えてゆく、つまらないことを、とりとめもなく書きつけていると、我ながら何ともあやしく、もの狂おしい気持ちがすることである。

これが、「ちくま学芸文庫」(注4)の現代語訳だと次のようになる。

- ④ さしあたってしなければならないこともないという徒然な状態が、このところずっと続いている。こんな時に一番よいのは、心に浮かんでは消え、消えては浮かぶ想念を書き留めてみることであって、そうしてみても初めて、みずからの心の奥に蟠っていた思いが浮上してくる。まるで一つ一つの言葉の尻尾に小さな釣針が付いているようで、次々と言葉が連なって出てくる。それは、和歌という三十一文字からなる明確な輪郭を持つ形ではなく、どこまでも連なり、揺らめくもの……。そのことが我ながら不思議で、思わぬ感興におのずと筆も進んでゆく。自由に想念を遊泳させながら、それらに言葉という衣裳を纏わせてこそ、自分の心の実体と向き合うことが可能となるのではなからうか。

翻訳のような④を含めてバラエティに富んでいる。要するに、受信が一様でない。これは受け取り方での差異であり、コミュニケーション上には問題がある。

以上、序段の現代語訳のサンプルをあげてみた。これらサンプルの訳を念頭に、他書の注等も取り上げ、諸説の比較を試みる。それらを比較するのには、序段をいくつかの部分に分けるのが手取り早い。

- 1、つれづれなるままに
- 2、日くらし、硯にむかひて
- 3、心にうつりゆくよしなし事を
- 4、そこはかとなく書きつくれば
- 5、あやしうこそものぐるほしけれ

以上五つに分けるのが、妥当なところである。それらについて、先学はどのような見解を示しているのか、比較(コミュニケーション)してみる。

1、つれづれなるままに(注5)

☆閑寂で、ものさびしい心境がふくまれている。(全集)

☆することもない状態なのにまかせて。「つれづれ」は、本書中、名詞として用いられたり、他の品詞と熟して、「つれづれと」「つれづれなり」「つれづれにて」などと使われているが、しようにもすることのないやりきれなさ・所在なさという原義は一貫していると思う。これを、清閑とか、閑寂とか、悠々自適とか、「まぎるるかたなく、ただひとりある」(第75段)心境とか解して、何らかの価値ある生活感情を認めようとするのは考え過ぎであろう。することもないやりきれなさ・所在なさが、随筆の執筆を促す動機となったのである。(全注釈)

☆この段は、古く寿命院抄に「序」として解釈されており、一段とは区別されていた。徒然草全編に対し、心境、内容、態度、感想を語るものと考えられる。(諸注集成)

☆することもないものさびしさにまかせて。「ツレヅレ、または、ツレヅレナ。すなわち、トゼンナ、孤独で物寂しい」(日ポ)(新訂)(注6)

☆何かをしたいというある意欲がありながら、することのない心身の状態である。(鑑賞と批評)(注7)

『全訳古語』(注8)では、「何もすることがなく、手持ちぶさたなさま。退屈なさま。」と「どうしようもなくひとり物思いに沈むさま」と二種の意味があげられ、序段が例文として載っており、前者の意味でとらえられている。「つれづれ」という言葉は、本書の題名の由来ともなっているように、そういう意味からも重要である。語源が「連れ連れ」であるならば、同じ状態が続いて退屈だ、という意味が適当であろう。ならば、前者。それに感情が加われば、孤独で物寂しい、などとなろう。ならば、後者である。意味の歴史的流れからいえば前者の「退屈」が本来だろうが、後者の「物寂しさ」で使われる例も少なくない。前者は、『全注釈』、後者は、『全集』『新訂』にあたる。

「物寂しさ」は、一つに、『日ボ』(注9)の「孤独で物寂しい」という解釈が影響を与えていると思われる。いわゆる中世語をまとめた『日ボ』であるから、その意味に近いだろうと考えるのは素直な考えであり、それも否定はできない。しかし、構文上、はたしてそうだろうか。これは序段全体に関わる問題であるが、文章とのコミュニケーションを正しくするならば、「つれづれなるままに」が、どこに掛かっているのか、ということがまずは問題となる。これは「書きつくれば」に掛かっていることが明らかであり、その場合、「退屈」系統の意味と「物寂しさ」系統の意味と、どちらに無理がないかを考えることが必要だ。私は「退屈」系統に軍配をあげたい。「寂しい」なら物思いにふけり、悲しみ、涙するのではないか、という単純な理由である。「つれづれ→書く」という文脈において、「退屈」ととらえるほうが、コミュニケーションの受け取り方として、素直であることは間違いない。

「つれづれなるままに」は続く表現と密接に関連するので、また序段全体のまとめ等で確定していくことにする。

2、日くらし、硯にむかひて

☆日暮らし。一日じゅう。底本・田中本にも濁点をうたない。(全集)

☆ひねもす。一日中、朝から夕べまで。「硯に向かひて」で、執筆のことがはっきりしていて微妙であると見える。(諸注集成)

「日くらし」は、一日中、で問題あるまい。朝から夕暮れまでということだ。ただ表記上は問題で、『全集』に記されているごとく、「濁点をうたない」場合と、「日ぐらし」と濁点表記の場合がある。濁点があれば「ひぐらし」で一語、なければ「ひ」「くらし」で二語とするのが普通だ。表記上の問題とは言え、看過はできない。これについては小松(注10)に卓見がある。

3、心にうつりゆくよしなし事を

☆何の・理由・仔細もないこと。(全集)

☆思うに、心の中を移り行くの意味で兼好は書いたにちがいない。「よしなしごと」は、記述内容を、たわいもないことと謙遜していったものである。(諸注集成)

☆古典の用例の「うつりゆく」は、すべて「移り行く」の意のみであるので、ここも、「移り行く」「移動する」の意に解すべきであると思う。心中に「よしなし事」がつぎつぎに移動し、去来する趣である(全注釈)

☆心の中を移動してゆく、とりとめもないこと。(新訂)

☆「よしなしごと」というのは、価値のとぼしい、つまらぬこと、の意であるが、それは、他人から見れば、という客観的な把握をした場合である。兼好自身では、興味もあり、ある程度価

値も認めている。しかし、その対象を、客観的にながめたら多分価値を認めがたいだろう、といっているのである。(鑑賞と批評)

「よしなし事」については、つまらないこと、で問題はあるまい。ただ、『鑑賞と批評』でも述べられているように、単なる謙遜というよりは、他人にとっては「つまらないこと」であるが、自分にとっては「重要なこと」だというニュアンスもないとは言えない。また後の表現と関連するが、「つまらないこと」だと思いながら、書きつけてみると、意外とそうではなかったという含みを持つのかもしれない。現段階ではそういう可能性があるということは否定しない。『筑摩』はまさにその考えを訳(解釈)に活かしていると言える。

前後したが、「うつりゆく」は、烏丸本(注11)と正徹本(注12)ともに平仮名表記である。漢字をあてる場合、「ゆく」は「行く」で問題はないが、「うつり」は「映り」と「移り」のどちらか、あるいは両方を掛けているか、ということが問題になる。『全注釈』は「移り」と断定しているが、はたしてそう決めつけてよいものだろうか。「移り行く」が本来だとしても、「映り」を重ねる気持ちがなかったと言えるだろうか。これについても即断は禁物と考える。「うつる」の用例を、『徒然草』を中心に中世の作品等から抽出し、詳細に検討する必要がある。本稿では疑問を投げかけるにとどめておく。

4、そこはかとなき書きつくれば

☆そこであるとはっきりしない意。(全集)

☆「まとまりはないが、書いて行く」という所に、著述意識がはっきりうち出されている。徒然草は、一見、そこはかとなきものではある。しかし、内面を貫く糸は、あるいは展開し、あるいは連続し、照応するところが少ない。富倉説に、無秩序を意味するのではなく、自由を意味するとされるのは、こうした客観主義的な解釈でなく、態度そのものを内部的に解されたからである。(諸注集成)

☆「そこはかと」は、はっきりした、明瞭なの意であるが、(語源は「其処は彼と」であろう)、これはその打ち消しであって、あてどもなく、目的もなく、漠然と、しっかりした考えもなくという意味になっている。(全注釈)

☆「ソコハカトナク。際限もなく」(日ポ)。通説は、特に定まったこともなく、あてどもなく。(新訂)

☆心に浮かんでは消えてゆく「よしなしごと」を、「そこはかとなき書き」つけた、というのは、第一段以後の内容が断片的であり、論理的ではないことを示している。すなわち「そこはかとなき」というのは、思い浮かぶ事柄のままに書きつけるのである。(鑑賞と批評)

「そこはかとなき」は、語源的には問題があるが(注13)、意味的には、はっきりとした目的もなく、でよいであろう。ただし、これそのものが兼好の本心とは断言できない。序段の中で、もっとも謙辞に近いのはこの部分である。ニュアンス的なものがかわるので、コミュニケーションとしては受け取りにくい面がある。

「書きつくれば」はいわゆる文法用語を用いれば、順接確定条件、ということになる。「確定」であるから、既に、もう書き記していることになる。序段は後からつけたされたと言われる一因となっている。いずれにせよ、序段は、本書の内容をある程度書いたのちに記したことは確実と言える。この「書きつくれば」が今までの表現をすべて受けることに注目したい。

5、あやしうこそものぐるほしけれ

☆「あやしうこそ」以下には、書きつけた文章についてではなく、筆者兼好の心情が吐露されている。この表現に、「こそ」という強意の助詞が添えられていることにも留意したい。(全集)

☆元来は、方丈記にもいうように、「物ぐるひのしわざに似たり」というに過ぎぬのではあるまいか。(諸注集成)

☆妙にばかばかしい気持ちができることだ。(新訂)

☆この「あやしう」は、変に、妙に、の意で、「ものぐるほし」の程度を限定する副詞である。(中略) 本来の重い意味では、狂気である、狂人じみている、軽い意味では、われながらばかばかしい、はしたない、と解している。わたくしも、気持ちがいじみているとする、これまでの注釈では極端すぎるように思っていたので、この説によることにした。(全注釈)

☆この表現態度(注14)には、徒然草を執筆しながら、その行為を第三者として見ている作者の目がうかがえる。この目は、結びの「あやしうこそものぐるほしけれ」にも現われている。「あやしうこそものぐるほしけれ」すなわち「ほんとうに変に常軌を逸しているようにも感じられる」というのは、気分のおもむくままに熱中してしまう自分を、冷静な第三者の目で見たらば、という条件付きでとらえたのである。(鑑賞と批評)

「書きつくれば」を受けた結果として「あやしうこそものぐるほしけれ」となったのである。「あやし」は、不思議、といった感じ。あるいは、予想外に、といった意味であろう。「ものぐるほし」が軽い意味で、ばかばかしい、というのは、妥当である。また、『全集』に記されるように、書かれた文章についてよりは、心情について吐露したものと考えるのが適当だろう。

書きつけてみると、こんなことを考えていたんだなあ、と思ってもよらない内容に、こんなことを記してどうなるのか、と書いた自分に自分であきれているというところであろう。単なる推測であるが、文章そのものに対して思うのなら「書きつくれば」の後に指示代名詞でもあつてしるべきではないだろうか。ただし、これも正確なコミュニケーションを期すなら、ニュアンスにかかわる表現ゆえ、額面通り受け取れないのは前述の表現と同様である。これも確定は避け、「心情の吐露」の可能性が高い、としておく。

6、序段全体

ここでは、序段全体に関わる見解をあげて、分析してみたい。

☆かような文脈における「つれづれ」の用法は、兼好の独創によるものではなかった。いずれもつとに指摘されているからには原文引用は避けがたいが、枕草子・終段、和泉式部集・雑巻首詞書、堤中納言物語・よしなしごとの一節など、確かに今問題の序段と酷似、と言い得る。(講座・第二巻)(注15)

☆この序段は、(中略)、五つの句から成り立っているのであるが、この五句一章の表現はいかなる構造をなしているのだろうか。このうち、第二の「日ぐらし硯にむかひて」は、第一三段の「ひとり、燈のもとに文をひろげて」と同じように、この一文における筆者の具体的、現実的な姿勢を示す句であるといえよう。そうすると、他の四句は、それぞれ緊密に結びついて、彼の制作境の種々相を表していると考えられる。(中略) その結構を、「つれづれなるままに」(随筆の動機的心境)「心にうつりゆくよしなしごとを」(その対象)「そこはかたなく書きつくれば」(その表現の手法)「あやしうこそものぐるほしけれ」(その結果の心境)のように把握され(全注釈)(注16)

☆以上のように、わずか一文でありながら、序段には、徒然草という作品の性格や、それを書いた作者の個性がみごとに結晶していて、深い意味を持つ。まとめるならば、(1)この著作は、余裕ある生活の中に何か物足りぬ心淋しさを感じて、書きはじめたものである。(2)著作には、自然や人事のさまざまについて、思い浮かぶままの話を、体系をととのえず書き記して行った。(3)書いている自分はそれなりに熱中したが、客観的に見れば、常軌を逸しているようにも見えるにちがいない。ということになる。こういう文章は、作品の執筆開始に際して書いたというより、全体を書き終えてか、ある程度の量を書き進めてから、序として付けたというべきものであろう。(鑑賞と批評)

ところで、『抜書』では、次のような記述がみられる。

☆『徒然草』の冒頭に記された「つれづれなるままに」とは、することがなくて退屈だから、ではなく、すればすることがあるのに——、支障ないし事情があって手がつけられず——あるいは、手がつかず——空白になった時間をもてあまして、というつもりの表現であると考えれば、よく理解できそうです。

☆「ひくらし」か「ひぐらし」か、という点についていうならば、これがひとまとまりとして副詞化の方向をとりながら、最後まで「ひ＝」は名詞の「日」として、また、「＝くらし」は動詞「暮らす」の連用中止法として、それぞれの機能を独自にはたしつづけていたとするならば、そのような状態において、複合の指標としての連濁が生じることはなかっただろうと考えるのが、証拠のない場合の穏当な推定のしかたでしょう。

☆「そこはかと」について、さしあたり考えられる可能性は、ある時期まで「はか」の部分に〈めあて〉という意味が生きていたので〔ソコハカ〕と発音されており、語構成が忘れられて以後は、それが、たとえば〈かさこそ〉とか〈ちらほら〉とかいうような擬態語に類した印象でとらえられたために〔ハ〕が保たれたのではないか、という可能性が想定されます。

☆もし兼好が、ここを〈気持ちがよい気分になる〉というつもりで書いたのだとしたら、「あやうこそものぐるはしけれ」と表現しているはずだということです。したがって、ここに見える形が「あやうこそものぐるほしけれ」となっていることは、くだいて言うなら、〈変てこで、ばかみたいな気分になってくる〉、すなわち、〈書いた自分があきれかえるような、とりとめのない事柄ばかりだ〉、ということであって、いわば軽い自嘲をこめた挨拶として読むべきことを意味している、と考えなければなりません。以下にはいろいろと並べたてる事柄は手すさびにすぎないのだから、まともなことなどひとつも書いてありません、ということです。

☆これまでの検討の結果に照らして、序段が謙遜の挨拶であるとしたら、それ自体で一つのまとまりをなしていることになりすから、第一段との間に切れ目があると考えなければなりません。しかし、それにしても、第一段の最初の「いでや」ということばが落ちつきません。(中略)ここは、いわば、付かず離れずということであって、兼好は、いちおう型どおりの挨拶をしたうえで、ごく自然に、それを本題につないでいるとみるのがよさそうです。(中略)ここは、章段を切らず、改行もせず、その境界にあらわれた影の重なり、兼好の文章の巧みさを味わうべきところでしょう。

小松は以上のような結論を、詳細な読みと、証拠(根拠)をもとにした、明晰な推論で導いている。序段の位置づけには多少の異論めいたものもないではないが、概ね納得できる見解である。蛇足ながら、『徒然草』を研究するならば、小松の姿勢(取り組み方、対象の捉え方、推論の仕方)を大いに学ぶのがよいと考える。

三、第二四三段について

末尾の第二四三段について、軽く触れておく。以下『全集』の本文より、全文を掲げる。

「八つになりし年、父に問ひて言はく、『仏は如何なるものにか候ふらん』といふ。父が言はく、『仏には人のなりたるなり』と。又問ふ、『人は何として仏には成り候ふやらん』と。父又、『仏の教へによりてなるなり』と答ふ。又問ふ、『教へ候ひける仏をば、なにが教へ候ひける』と。又答ふ、『それも又、さきの仏の教へによりて成り給ふなり』と。又問ふ、『その教へ始め候ひける第一の仏は、如何なる仏にか候ひける』といふ時、父、『空よりやふりけん、土よりやわきけん』といひて、笑ふ。『問ひつめられて、え答へずなり侍りつ』と、諸人に語りて興じき。」

本当のコミュニケーションとは、正しく送信し、正しく受信することである。「本当の」とは、しっかり伝達ができる、わかりあえる、というような意味であり、「正しく」とは、自分の言いたいことを（できるだけ）ゆがまないように伝え、相手の言いたいことを（できるだけ）ゆがまないように受け取る、ということに他ならない。古典とのコミュニケーションなら、古典への正しい問いかけと、正しい読み取りをすることである。「正しい問いかけ」とは、先入観のない切り込みであり、正しい読み取りとは、古典文学を客観的にまっすぐ受け取ることである。この点で、小松の姿勢は是非とも見習うべきものと言える。

『徒然草』とのコミュニケーションをおこなうのなら、冒頭、「序段」とはもちろん、末尾、「第二四三段」とのコミュニケーションをはからなくてはならない。序段が、本書全体の方向性を示すものなら、第二四三段は本書全体をまとめるものであるととらえるのが普通である。本稿は序段を中心として論じているが、第二四三段にも触れ、今後の研究の礎としたいと考える。

さて、第二四三段は、本書全体のまとめとするのに、一般的にはふさわしくはない。自己の主張がまったく記されていないからである。しかし、八歳の子供にして、父親を相手にして、仏の存在を、徹底的に追及する姿勢は、まさに「三つ子の魂百まで」であり、好奇心に充ち溢れている。これについて先学の考えを若干あげ、分析し、一応の見解をまとめておく。

☆自賛の一段である。ただユーモラスな表現において、兼好がみずから客観化していることは、『徒然草』に一貫しているところである。少年兼好の父への質問が、きわめて論理的で明晰であり、同時に形式論理的でもあることが特徴となっており、少年期の兼好が、そうであったであろうと同時に、これを書いた兼好の思想が、またそうであったであろうことを、おのずから示している。（全集）

☆本段は、兼好八歳の幼時に、「仏」の始源につき、父と問答し、終りに父を問い詰めたことと、父がそれを「諸人に語りて興じた」事実とを階層的に記したものである。主要部は、父との問答にあるが、勢いこんで、「また問ふ」を三度くり返して父に迫っている、幼い彼の一閃で、しかも徹底した気質がよく顕現している。（中略）近代でも、この段に、何か深い意図や作意を考えようとする注釈もないことはない。（全注釈）

☆この説話の主旨は、「仏」に対する幼稚な兼好の質問であり、また、それに対する父の解答なのである。仏教の大きなテーマがこの短い父子の会話に凝縮されていると私説では考えたい。（中略）幼少時の兼好が父から教えられたこのことの意味を、晩年の兼好が自覚的に共鳴し得たからこそ、この説話が最終章をしめくくる機能をもったものとして位置づけられたものに他ならない。（研究と講説）（注18）

☆私は本段を読むたびごとに、長年月に亘って書きつけ、書き継いできた、それ自体彼の心の遍歴の記録でもある徒然草の筆を擱くに当って、遠く彼方に過ぎ去った幼いころの自分自身と、その自分をいつくしんでくれた父親の姿を、なつかしくふりかえっている老境の作者の茫々然と

した面持ちを、心に思い描くのである。(講座 第三卷) (注19)

『全集』は穏当な見解である。可もなく不可もなく、といったところか。

『全注釈』は、引用文が短いため、わかりにくくなっているが、本段に深い意図や作意を考える必要はない、という考え、つまり大した意味はないという見解である。

『研究と講説』は、最終章に置かれるべき意味があると考えている。

『講座 第三卷』は、強くではないが、置かれるべき意味があるという立場である。

幼い兼好の父との仏問答は、幼いがゆえに幼稚ととられてもしかたがないというところもある。幼稚であるとすれば、大した意味はないという考えも出てこよう。では、兼好は、何ゆえに幼い時の父との仏問答の思い出を、最終段に位置づけたのか。もしも本段にたいした意味がないとしたら、それは本書が未完成で、思い半ばで本段を途中まで記した時点で、兼好はこの世を去ったということにならないか。蓋然性の問題だが、私は、『研究と講説』の考えを支持する。もしも小松が第二四三段を位置づけるとしたらはたしてどうなのか、興味津津なのだが、それは小松は記していないので、『筑摩』の解説を掲げてまとめとしたい。

☆父が最後には、匙を投げたように、根源的な問いかけであればあるほど、答えはない。けれども答えのない問いかけを発すること自体が大切なのであって、兼好が「心にうつりゆく由無し事」を書き留めていったことは、自分自身で、問いを発し、答えを模索していった過程にほかならない。(中略) それにしても、何という素晴らしい擲筆であろうか。究極の答えは、とうとうなかった。しかし、それでよいのだ。父が楽しそうに人に語るのを、幼い兼好は、その場において聞いたのだ。

島内の見解はやや感傷的にすぎるきらいはあるが、序段と関連付け、兼好の子供の時の心情と成長した彼の英知を讃えている点、大いに賛同したい。

四、まとめ

序段についての問題点を片端からあげれば、次のようになる。

- 1、「つれづれ」の意味は何か
- 2、「ひぐらし」か「ひくらし」か
- 3、「うつり」は「移り」か「映り」か
- 4、「よしなしごと」の真意は何か
- 5、「そこはかと」は「其処は彼と」か
- 6、「かきつくれば」はどういう意味か
- 7、「あやしう」の意味は何か
- 8、「ものぐるほしけれ」の意味は何か
- 9、序段と第一段の関係はどういうものか
- 10、序段全体の真意は何か
- 11、序段と第二三四段は照応しているのか

1の「つれづれ」については、退屈の系統で抑えておくのが適当だと思う。ただし、単なる退屈ではなく、小松が言うように、「すればすることがあるのに」「空白の時間をもてあまして」ととらえるのが、今のところ最善である。

2も小松の言うように「ひくらし」と清音がよい。

3の「うつり」は断定できない。私見では「移り」が中心としても「映り」のニュアンスがこ

められているとみるほうがよいのではないかと考えている。

4の「よしなしごと」は、意味的には「つまらないこと」でよいが、これは『鑑賞と批評』にあるように、自分ではそうは思わないが、他人から見たらつまらないこと、という捕らえ方が望ましいと思う。これは後の「そこはかとなく」と連動する表現で、一応謙遜の表現と考えておきたい。

5の「そこはかと」は「はか」を目的として捕らえる小松の見解は面白い。「其処は彼」というのが定説であるが、「は」を安易に「ワ」と読んではいけない、という姿勢は大事だ。もって肝に銘じたい。

6の「書きつくれば」は確定条件であるから、すでに何らかの書いた内容があるということだ。したがって序段は『鑑賞と批評』にあるように、ある程度の分量を書いた後に冒頭に置いた可能性が高い。その場合、小松の言うように、第一段の「いでや」と関わる問題がある。断定はできないが、私見では「いでや」も序段を記すときに付加されたものと見ておきたい。

7の「あやしう」は、不思議で、意外で、ととるべきだろう。「ここにうつりゆく」事を書き付けてみると、こんなことを思っていたのか、ということで、島内の考えに賛同したい。8の「ものぐるほしけれ」を修飾するというより、並立的にとらえるということを考えてみたい。極端に言えば「ものぐるほしけれ」という気持ちの原因となったという捉え方である。

8の「ものぐるほしけれ」は、小松の見解に賛成する。「変てこでばかみたい」ということでいいだろう。「気持ちがいじみた」は何にしても強すぎて不自然である。

9については、序段が第一段の成立後に置かれた（記された）ことは確定的だが、第一段との関係をいうなら、序段を記した時点で「いでや」も付加したと考えれば問題はない。

10については謙遜の言葉と抑えておくのが妥当であるが、短い一文で兼好の執筆姿勢をすべて盛り込んでいると見られるように、単なる謙辞とはとらえないほうがよい。類似な表現が他の作品にみられるとはいうものの、似て非なるものである。また、小松が言うように「つれづれと」ではなく、「つれづれなるままに」とあることから、「つれづれ」のイメージが序段全体に及んでおり、さらには第一段から本書全体に影響を及ぼしていると思われる。そういう意味で序段は重要であり、兼好の本書への心意気が示されていると思われる。序段から、兼好のメッセージは強く発せられていると思う。

本稿の最大のテーマは11の、序段と第二三四段の関係についてである。最終段の兼好の幼い時の父との思い出は、単なる思い出ではなく、彼の一生をつらぬく思い出と考えられる。彼の一生は好奇心にあふれ、人間の、世の中の、本質・根源の追及であった。その原点が第二三四段にある。島内の言うように「答えのない問いかけを発すること自体が大切なのであって、兼好が『心にうつりゆく由無し事』を書き留めていったことは、自分自身で、問いを発し、答えを模索していった過程にほかならない。」ということであり、賛意を示したい。兼好は、冒頭序段と、最終段の第二三四段とが照応していることをメッセージに組み込んでいた。それを読みとることが古典とのコミュニケーションということになる。

(注1)『日本古典文学全集』(小学館・永積安明)以下『全集』と呼ぶ。烏丸光広本を底本とする。

(注2)『徒然草諸注集成』(右文書院・田邊爵)以下『集成』と呼ぶ。

(注3)『徒然草全注釈』(角川書店・安良岡康作)以下『全注釈』と呼ぶ。

(注4)『徒然草』(筑摩書房・島内裕子)以下『筑摩』と呼ぶ。

(注5)以下☆は筆者記す。

- (注6)『新訂徒然草』(岩波書店・西尾実・安良岡康作)以下『新訂』と呼ぶ。
- (注7)『徒然草の鑑賞と批評』(明治書院・桑原博史)以下『鑑賞と批評』と呼ぶ。
- (注8)『全訳古語辞典』(旺文社)
- (注9)『日葡辞書』のこと。
- (注10)『徒然草抜書』(講談社・小松英雄)。以下『抜書』と呼ぶ。
- (注11)「烏丸光広本」は最重視されている伝本。
- (注12)「正徹本」は第二位にランクされている伝本。
- (注13)「そこはかとなく」は「其処は彼となく」が定説。小松は異説を唱える。
- (注14)「この表現態度」とは、兼好の「他人から見れば、とという客観的な把握」のこと。
- (注15)『徒然草講座 第二巻』(有精堂)
- (注16)『全注釈』はこの部分、古田の考えの引用をしている。
- (注17)『徒然草 研究と講説』(桜楓社・佐々木清)
- (注18)『徒然草講座 第三巻』(有精堂)